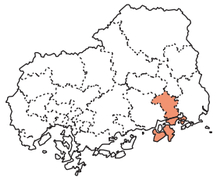
表出する景

令和５年度　卒業設計　令和２年２月　ｓ207039　山口裕士　指導教員　井上亮　島根大学総合理工学部建築デザイン学科

1. 敷地概要

1. 1　尾道の概要



広島県尾道市は瀬戸内海のほぼ真ん中に位置する人口約１３万人のまちで、ＪＲ尾道駅東側一帯に広がる旧市街地の「町」、南部の瀬戸内海に囲まれた「島」、北部の緩やかな山々に覆われた「斜面市街地」の３つのエリアで構成されている。それぞれ異なる歴史と景観、文化が混ざり独自の空間を作り出している。設計は「斜面市街地」を対象として行う。

1. 2　斜面市街地形成の背景

山は古来から聖域で宅地開発が制限

↓

明治 24 年の山陽鉄道（ＪＲ山陽本線）敷地で立ち退きを強いられた人々に開放されたこと契機に居住域が拡大
また、豪商や名家が山手に「茶園」を建てることが流行

↓

明治・大正・昭和戦前期にかけて多様な建築群が建ち並ぶ

↓

戦後は復員兵のためのバラック建築も急増し、各時代の特徴を残す建築遺構が残る

↓

急峻で道幅も狭く、法的にも大規模な更新や再開発が困難な故、旧情がよく保たれている

中世以降の寺社

茶園建築

洋館、洋館付き住宅

バラック、高度経済成長期の建築

1.3　斜面市街地の現状

3-a 空き家の増加と廃屋化

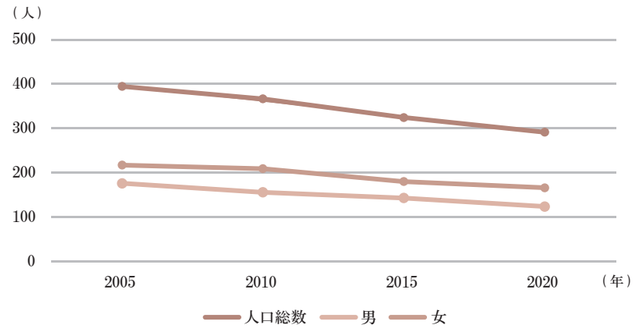
斜面地の景観を形成する独特な古い建物には建築価値が高いものや個性的なもの、景観が優れているものなど様々な魅力を持った建物があるが、その不便さゆえに空き家が増加し続け、長年の放置により廃屋化が進んでいる。

斜面市街地の空き家率＝19.2%（空き家 426 戸 /2,213 戸　平成 20 年度市独自調査）
斜面市街地の空き家率＝24,0%（空き家 582 戸 /2,426 戸　平成 27 年度市空き家等実態調査）

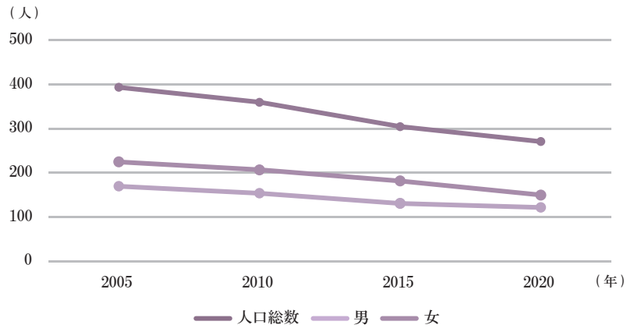
3-b 人口減少

斜面地の西土堂町、東土堂町ともに人口減少、世帯数の減少の傾向がみられる。

西土堂町の人口推移



東土堂町の人口推移



3-c ＮＰＯ尾道空き家再生プロジェクトの活動

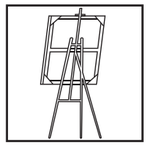
地域住民でプロジェクトを共有するために
次の５つの要素をもとに活動を行っている

abandoned house × architecture

町家や土蔵
茶園建築や洋風建築
尾道建築の魅力や職人技の発信

abandoned house × environment

不要な家財道具の Reuse、Recycle
廃材や古道具の再利用
再建築不可能な更地の緑化



abandoned × art

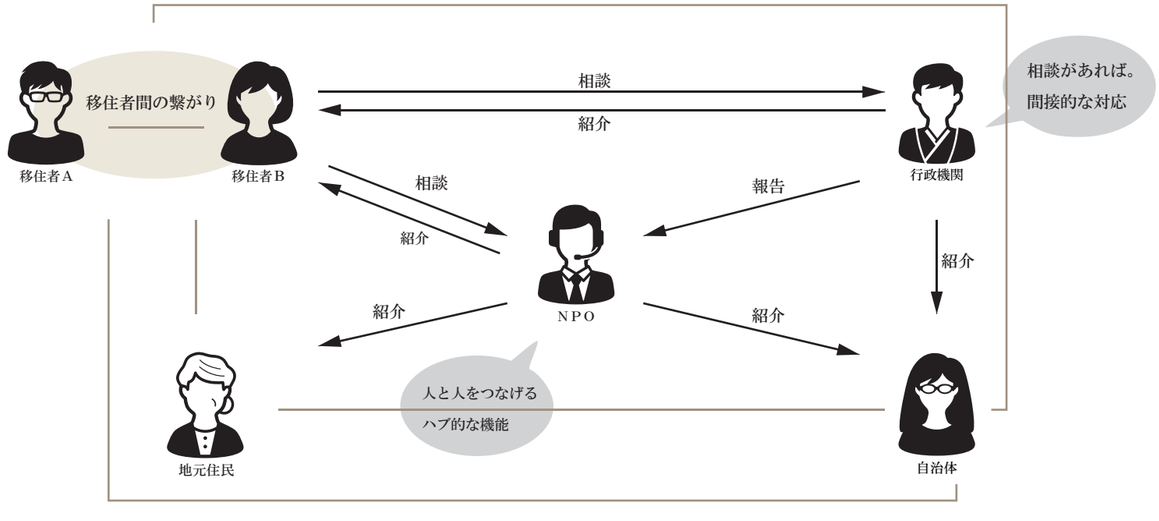
アーティストのための寮
アトリエ、ギャラリー等への転用
長期滞在可能な制作・発表の場

abandoned × tourism

短期賃貸としての利用
尾道での暮らしの体験
町並み探索の活性化

abandoned house × community

空き家の里親探し
移住者への暮らしのアドバイス
空き家・空地を使ったイベント

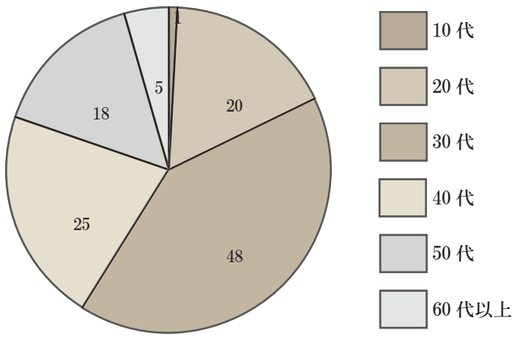


3-d 若い世代の移り住み

近年、全体的な人口減少とは対照的に県内外を問わず比較的若い世代が尾道の斜面市街地に移り住み、カフェや雑貨屋、印刷屋などの店舗を次々と開設。

↓

アーティストインレジデンスが設けられ写真家や画家などの数多くのクリエイターが集積する中で独自の文化が形成されつつある。



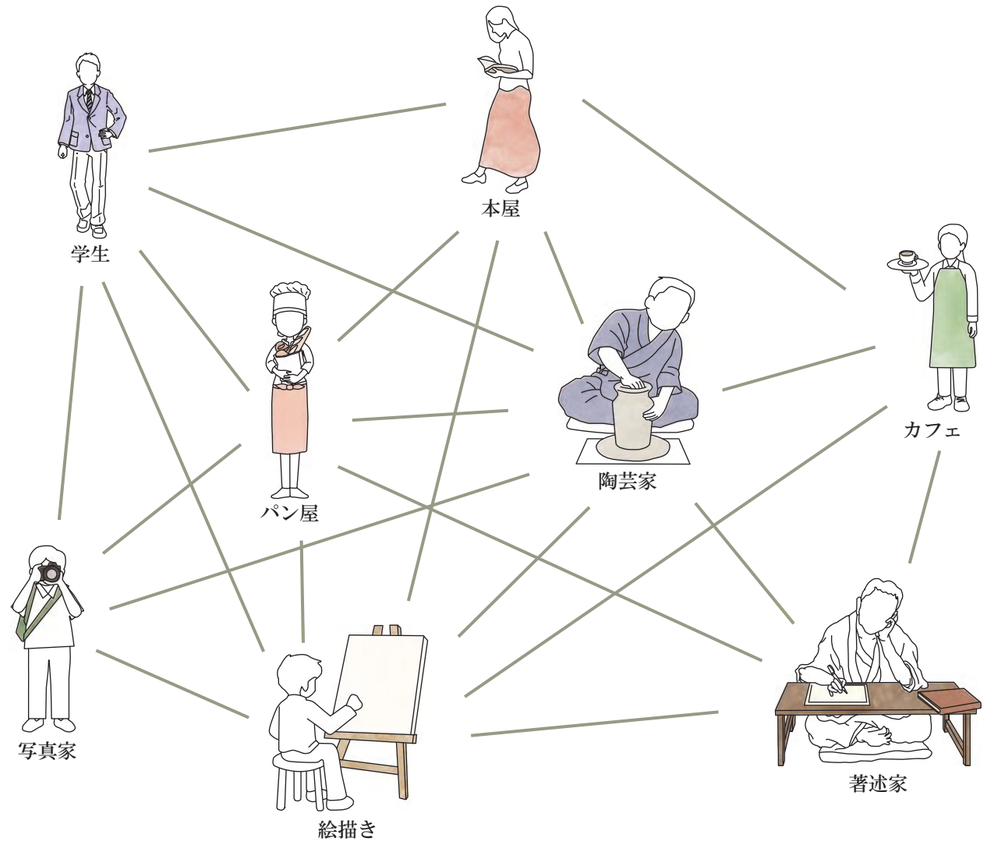
H21 年 10 月～R3 年 3 月における移住者の年齢分布

珈琲店

茶屋

カフェと活版

陶房



空地での移住者同士、地域住民と移住者の交流のイベントを開催することでコミュニティを形成している。

斜面市街地に住む人間は代謝され、新たな文化形成に合わせて関係性が再構築されているが、建築的な関係性は変化していない

そこで、個人単位の改修を町単位に昇華させることで新たな文化が形成されつつある尾道のこれから先の新しい姿を示すことを目的とする

2. 設計計画

2. 1　計画敷地

対象地は千光寺へと上がる主要な路地からは１つ外れた通り沿いの空間。
西と北を山に囲まれているため、南に位置する光明寺から千光寺へと抜ける人の通りとして使われることが多い。
店舗を開いている移住者が多い中、空き家も同じく多い場所である。

2.2　対象地詳細

敷地中央の通りを中心に４つの建物の改修を段階的に行う

周辺には山手の移住者のパイオニアである「ネコノテパン工場」をはじめ、「陶房ＣＯＮＥＬ」や「ＡＩＲ　ＳＨＩＰ　ＣＯＦＦＥＥ」などのお店が存在する。

ｉ：ネコノテパン工場

ii：陶房ＣＯＮＥＬ

iii：ＡＩＲＳＨＩＰ　ＣＯＦＦＥＥ

改修対象建物

①の住宅

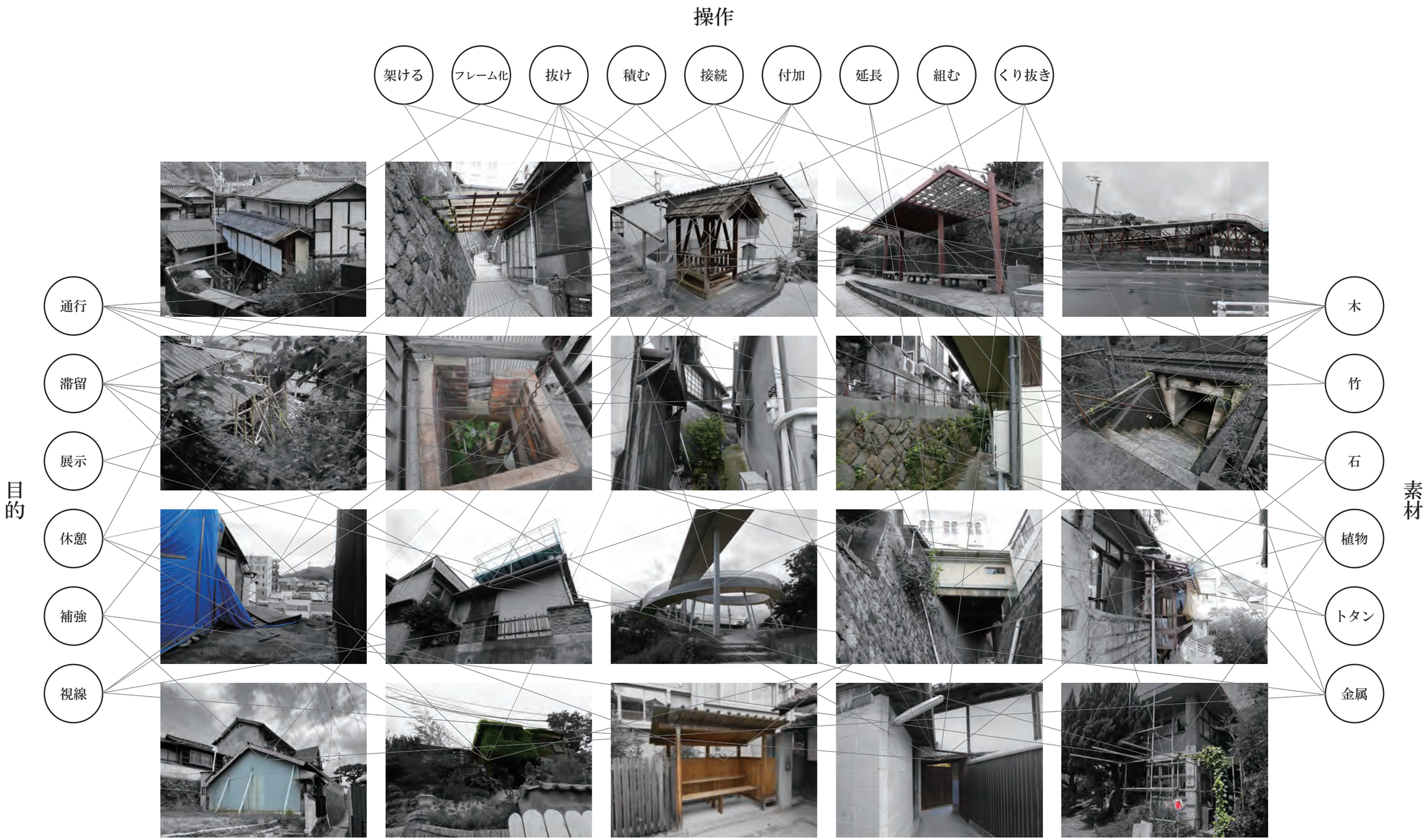
②の住宅

③の住宅

④の住宅

2.3　改修の手引き

尾道の斜面市街地を散策する中で見つけた特徴的な架構、場所をもとに景観を形成している要素を解釈し、改修に組み込むことで新たに町全体の雰囲気を形成していく指標とする。



2.4　段階的な改修

ｐｈａｓｅ1：職住空間

住む人の生活や店舗の様子などが外部に開くように建物を中心に改修を行う

ｐｈａｓｅ2：余剰空間

敷地外構まで改修が拡大し、住み手の活動が直接的に外部に現れる

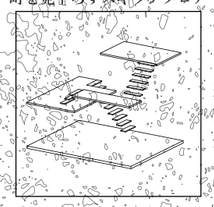
ｐｈａｓｅ3：路地空間

通りにまで改修が及び、それぞれの改修が繋がり、関係を持つようになる

坂の町 cafe

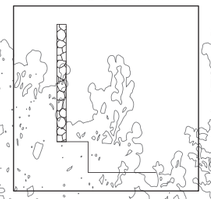
既存部分
phase1
phase2
phase3

町を見下ろすスキップフロア



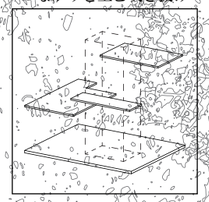
山頂まで階段が続く尾道の町を縮小したような空間。尾道の感覚を存分に体験してほしい。

路地に面した腰掛け



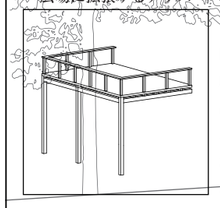
ひと休みしたり、談笑したり、向かいのパン屋さんで買って一緒に食べたり…。色々な関わりが生まれる些細な段差。

つながりを生む吹き抜け



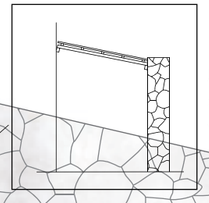
斜面地は上下の関係性が生まれやすい。前面の開口を開ければ1階から3階、そして内と外がすべて繋がる。

広場に拡張するテラス



隣接する猫の額ほどの広場が最近市場になり、出店者を募集中らしい。新たな移住者さんと何かつながりを生むきっかけになるかも。

隠れ家的空間

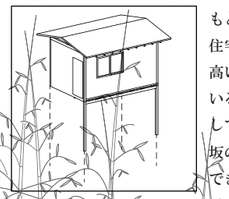


屋根をかけるだけで現れる石垣と建物の間のひっそりとした空間。ここにはゆっくりとした時間が流れている。

建築家の家

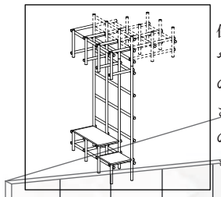
既存部分
phase1
phase2
phase3

上に付加した個人部屋



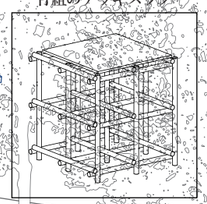
もとは１階建てだった住宅に２階部分を付加。高い石垣の上に建っているという土地を活かして新たな２階からは坂の町を見渡すことができる。

路に延長した竹組ベンチ

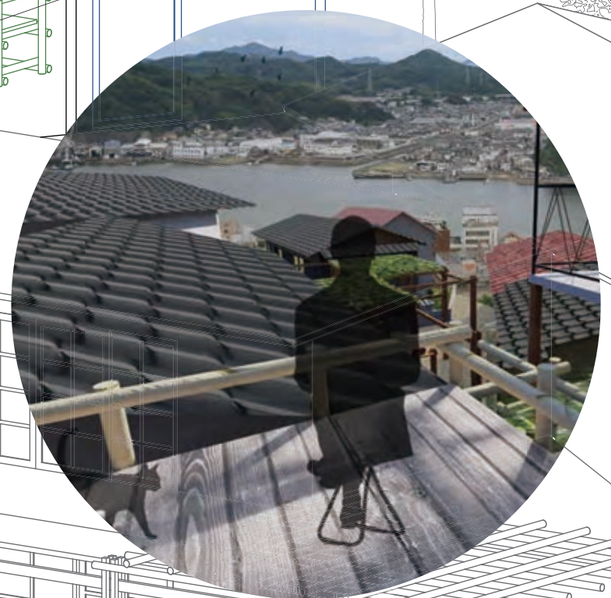


住民たちの井戸端会議や観光客の坂の町散策の休憩所、隣のパン屋さんや向かいのカフェの食べるところとしても使われる。

竹組のデッキスラブ



地域住民や市から竹の放置をどうにかしてほしいという依頼が。竹を組んで作ったデッキからは町を見渡すことができる。

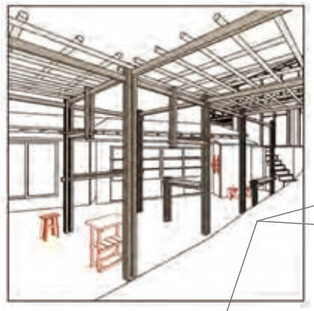


体験工房

既存部分
phase1
phase2
phase3

路地から覗える製作所

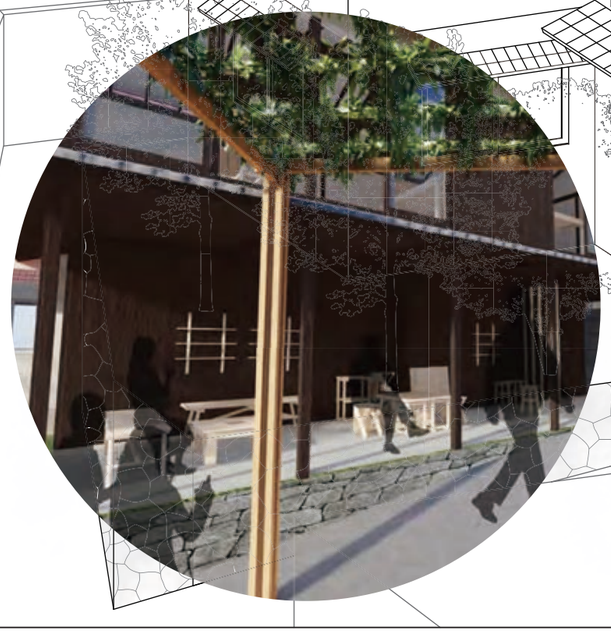
歩いて登ってくる人から中の様子が覗える製作・体験所。制作の様子や町の人の声が外から内へ、内から外へ聞こえてくる。

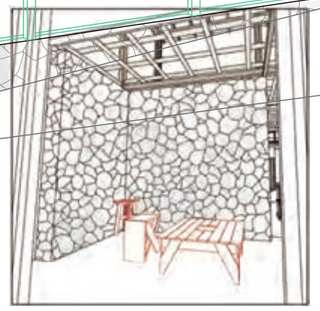


通り中央の架構

園芸店の販売所

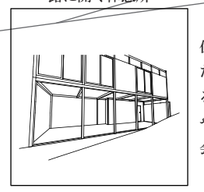
パン屋の待合



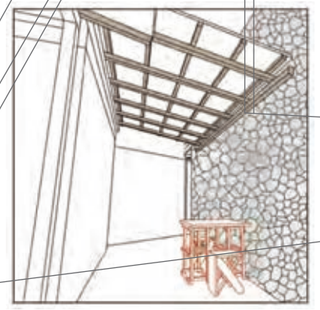


園芸店の半屋外空間

路に開く休憩所



住人や町の人が制作した家具が設置されている。町並み探索の休憩や近隣住民の小さな集会などに使われる。



cafe の隠れスポット

園芸店

既存部分
phase1
phase2
phase3

竹組の藤棚

蛇籠や束柱、プランターから緑が伝う。
半屋外空間を彩ると共にお店の空間も形成する。

くり抜いて作るベランダ

建物を支えるプランター

建物を補強しつつ店舗の様子を外部に働きかける。

きっかけを生む束柱

植物が絡みついて広がる手掛かりとなる。
自由な高さに梁を挿入可能で可変性が高く、空間を更新しやすい。

減築に伴う補強

石の町でもある尾道。
蛇籠を耐力壁とすること光や風を通す半屋外空間を形成したり、植物が芽生え手掛かりにもなる。